



JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Monday 19 May 2003 (morning)
Lundi 19 mai 2003 (matin)
Lunes 19 de mayo de 2003 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。(コメンタリーを書きなさい。)

1 (a)

燃エガラ

夢ノナカデ
 頭ヲナグリツケラレタノデハナク
 メノマヘニオチテキタ
 クラヤミノナカヲ
 5 モガキ モガキ
 ミシナ モガキナガラ
 サケンデ ソトヘイデユク
 シユボツ ト 昔ガシテ
 ザザザ ト ヒツクリカヘリ
 10 ヒツクリカヘツタ家ノチカク
 ケムリガ紅クイロツイテ

 河岸ニニゲテキタ人間ノ
 アタマノウヘニ アメガフリ
 火ハムカフ岸ニ燃エサカル
 15 ナニカイツタリ
 ナニカサケンダリ
 ソノクセ ヒツソリトシテ
 川ノミヅハ満潮
 カイモク ワケノワカラヌ
 20 顔ツキテ 男ト女ガ
 フラフラト水ヲナガメテキル

ムクレアガツタ貌ニ
胸ノハウマデ焦ケタダレタ娘ニ
赤ト黄ノオモヒキリ派手ナ
25 ボロキレヲスツポリカブセ
ヨチヨチアルカセテユクト
ソノ手首ハブランブラント揺レ
漫画の国ノ化ケモノノ
ウラメシヤアノ恰好ダガ
30 ハテシモナイ ハテシモナイ
苦患ノミチガヒカリカガヤク

(原民喜、『原爆小景』一九五〇)

- この詩の主題は何だと思えますか。詩の題名「燃エガラ」はそのテーマとどんな関係があると思えますか。
- この詩の表現や文体にはどのような特徴がありますか。そして、それらによって、どのような効果が生じていますか。
- この詩を通じて、詩人は何を言おうとしていると思えますか。
- あなたはこの詩を読んで、何を感じますか。

(注)

原民喜(はらたみき)(一九〇五〜一九五二)詩人、小説家。同人誌『ペリコーン』に参加、『忘れがたみ』『壊滅の序曲』などの詩集があり、『夏の花』という短編小説集も描いている。

1 (b)

年が替つても、女は自分と共に男が置き去りにして往つた、彼の荷物の処置を思いつくことはできなかつた。

5 去年の秋、男が去つた日の前日か、前々日かが、雨であつた。四、五日経つて、女は自分と男の傘が窓の手摺りに横たわっているのに気がついた。女には、その二本の傘をそこへ置いた覚えは全くないので、男が置いたのかもしれない。が、男に去られた狼狽で、女は自分のした事を忘れてしまつたのかもしれない。拵げてみると、二本の傘は曇まれたまま、すっかり乾いているようだつた。女はそのどちらにも丹念に布の折り目を調べ、止め紐を廻して金輪をしっかりと釦にかけた。が、自分の傘を靴箱の内の傘入れに立てると、男のほうのは、そこに見出した彼のもう一本の傘と一緒に紙で巻いて紐を掛け、押入れに納め込んだ。(省略)

10 女には、男が決して戻つて来ないということがはつきり判つていた。「もうあなたなどに居てもらわなくてもいい」と女は本音どころではないその言葉を言わずにはいられないような態度を男に幾度も見せられた。そうして、彼女が又それを言わずにはいられなかつた時、男は「どうもそうらしいね」と言つて、そのまま去つたのだつた。女の味わつた後悔は苦しいものであつた。本音どころではない、あのような言葉を口にしつけるようになった自分のこと、あの日も又それを口にしたばかりに男に乗せられた自分のことを、女は激しく後悔した。が、その後悔が苦しいのは、それを顧みるたびに、暫く前からの男の態度とあの日の鮮やかな乗じ方からして、後悔する資格さえない状態に自分が在つたということを告げられるからなのだつた。そうして、そういう苦しさは、女に男を追わせる気力を失わせた。

15 女は男に荷物を引き取つてくれるようにと連絡する気持さえ、もうなかつた。「どうでもいいようにしてくれ」という答えが返つてくるに決まつているからだ。実際、男が置き去りにしたのは、男にとってはどうでもいい物かもしれない。ふたりの仲が深くなり、女の許で寝泊まりすることが永く続くようになりはじめた時、男は必要に応じて少しずつ身の廻りの物を運び込んできたのだつた。が、男は殆ど女の許で暮らすようになってからも、自分の下宿は引き払わず、そこには洋服箆も机も幾つかの洋服箱もスキー道具も寝具も残つている筈であつた。女の洋服箆にあつた当座の衣服は持ち去つていり、それに男の仕事は向上しはじめていたように思われる。女の許に残した古着になど未練はないに違ひなかつた。

20 25 30 しかし、女のほうでは、それらの処置について全く途方に暮れていて、女は男が使い放しにして往つた品物を片附けた後、残された品物を処分する方法をどうしても思いつくことができなかった。引き取ってもらふように、男に連絡した時に、「捨ててくれ」と言われるのも、「まだそのままかい？ じゃあ、送つておいてもらふかな」などと言われるのも厭であつた。が、たとえ人を介し

とするにしても、男にそんな連絡をすることが先ず厭であった。かと言つて、まだ充分役に立つ、他人の品物を勝手に屑屋に持って行かせたり、捨てたりするのも、厭であった。また、自分と一緒に男が置き去りにした品物をひとに与えるわけにもゆかなかつた。(省略)

35

今年、春めいた日が多くなりはじめてきた時、女はすっかり痩せてしまつていた。男の荷物は相変わらず女の許にあつた。男の見えない荷物が、家にいる間じゆう女にのしかかり、お金のないために男のそんな煩わしい荷物と共に置き去りにすることのできない自分の荷物とその暮らしの場を一層女に厭ませ、そうして寝巻の上に咄嗟に掴んで持ちだした何かを羽織つただけの身なりで深夜に野次馬たちが詰めかけ消火の水の流れている道路を素足で拉致されてゆく自分の姿を女に繋く見せるようになっていた。

40

そのうち、意識の上でだけ女にのしかかつていた、納つてある男の荷物が女の眼に次第に映るようになりはじめた。洋服箆箭の上の引きだしが半透明の物質に變じたように、そこに入っている男の下着を白く映し、靴下らしいものを黒く映している。(省略) 太らなくてはいけない。体力をつけなくてはいけない。――女は思った。そうしなければ、箆箭の引き出しや唐紙や机の引き出しがガラスようになってゆくことであらう。

(河野多恵子、『骨の肉』一九七一、講談社)

―この作品での「女」と「男」はどんな関係を持っていますか。作者はその関係を文章表現やイメージなどにどのようにあらわしていますか。

―作者はこの作品の「女」の自己アイデンティティをどのように描いていますか。

―この作品の現実と想像の関係について述べなさい。

―あなたはこの文章を読んで男女関係についてどう思いますか。

(注)

河野多恵子(このたえこ)(一九二六〜)小説家。五〇年『文学者』としてスタートし、『幼児狩り』で同人雑誌賞。六三年『蟹』で芥川賞受賞。『最後の時』『回転扉』などの作品がある。